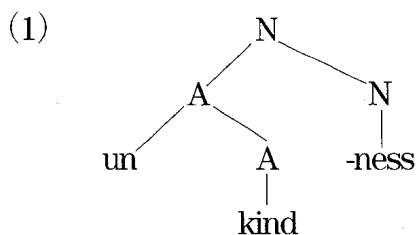


派生語形成における接辞制約の問題*

高橋 勝 忠

1. はじめに

派生語形成の仕組みは、伝統的には接辞と基体の組み合わせを検討することによってこれまで研究が進められてきた。例えば、接尾辞 (-ness) は形容詞を基体 (e.g. kind) に範疇選択 (c-selection) すれば kindness の派生語ができ、接頭辞 (un-) は同じ形容詞の基体を選択すれば unkind の派生語ができる。unkindness の派生語は辞書に指定される un- や -ness のこれらの下位範疇化素性に従って形成され、kindness に un- が付加されるのではなくて unkind に -ness が付加されて生成される。このように派生語の内部構造は接頭辞・基体・接尾辞が線形的に並んでいるだけではなくて (1) のような階層的な構造関係により派生される。



従来、生成形態論は接辞の組み合わせがどのように行われるのかという観点

* 本稿の内容は、第22回甲南英文学会（平成18年7月1日、甲南大学にて）と関西レキシコンプロジェクト（KLP）（平成18年9月16日、西宮市大学交流センターにて）の例会での口頭発表がもとになっている。

から様々な提案がなされてきた。Siegel (1974), Allen (1978), Kiparsky (1982, 1983) 等によるレベル順序づけの仮説 (Level Ordered Hypothesis、以後LOHと言う) はその出発点となる最初の提案である。レキシコンの中であらかじめ接辞にレベルを指定し、順序づけられる (e.g. natural(1)-ness(2), national(1)-ity(1)、括弧内の数字は以降、接辞のレベルを示す)。LOHは、同じレベルかレベル1・2の組み合わせは許されるがレベル2・1の組み合わせ (e.g. *involvement(2)-al(1), *in(1)-friendly(2), cf. un(2)-friendly(2)) は許されないという考え方である。しかし、この考え方にはすぐに反例 (e.g. un(2)grammatical(1)ity(1), *youngish(2)-ly(2), *firmness(2)-ful(2)) が見つかる¹。

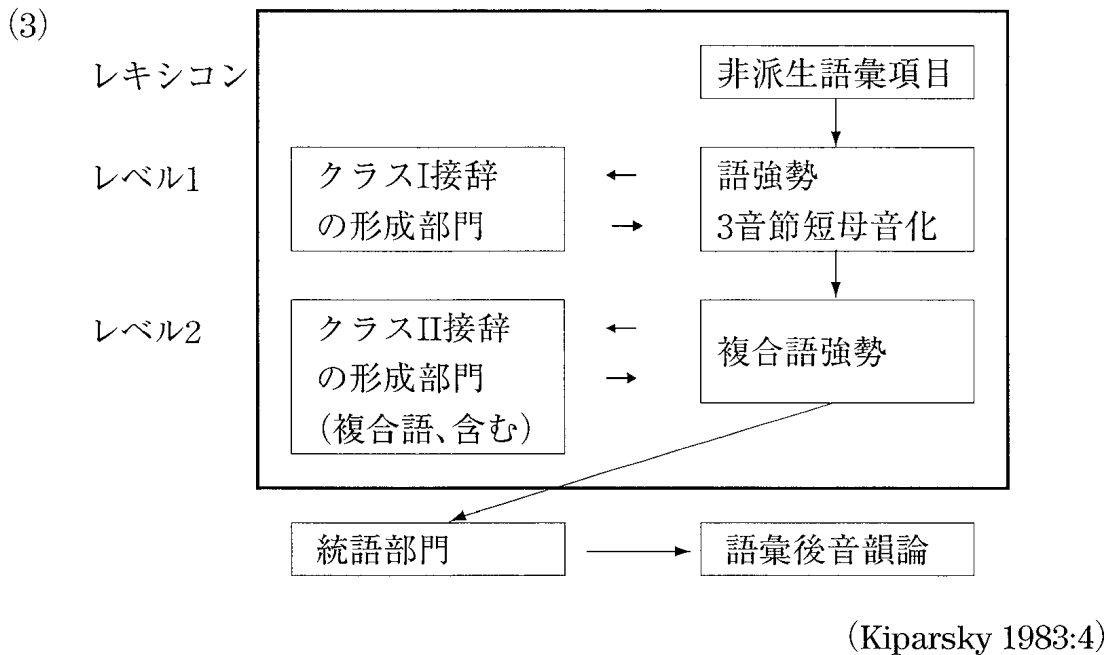
小論では、派生語形成における接辞の一般制約として2節においてLOHの分析を簡単に紹介し、LOHの問題点を指摘する。3節では、LOH以後、派生語形成の一般制約として仮定するFabb (1988) の選択制限 (Selectional Restriction)、Hay (2002, 2003) の複雑性に基づく順序づけ (Complexity-Based Ordering)、Aronoff and Fuhrhop (2002) の単一語基制約 (Monosuffix Constraint) の各分析を紹介しながらそれぞれの問題点を指摘する。4節は、まとめである。

2. LOHの分析とその問題点

Siegel (1974) で最初にLOHが提唱され、その後Allen (1978) に引き継がれ、Mohanalan (1982, 1986), Kiparsky (1982, 1983) 等の語彙音韻論 (Lexical Phonology) へと発展するが、基本的には (2) のように、レキシコンの中であらかじめ接辞に共通のレベル (=クラス) を指定し、(3) に見られるような語彙音韻論の枠組みにおいて音韻規則と形態規則を連動させ、順序づけることによってLOHは (4) の派生語の容認性を捉えることができる。

1 *unfriendlyとungrammaticalityの派生は、in-やun-の接頭辞が形容詞の範疇を最初に選択するのが前提となる。したがって、friendlyのあとにin-が付加し、ungrammaticalが形成されたあとに-ityの接辞が付加されている点に注意したい。

- (2) Class I 接尾辞: +ion, +ity, +y, +al, +ic, +ate, +ous, +ive
 Class I 接頭辞: re+, con+, de+, sub+, pre+, in+, en+, be+
 Class II 接尾辞: #ness, #less, #hood, #ful, #ly, #like
 Class II 接頭辞: re#, sub#, un#, non#, de#, semi#, anti#
 (Spencer 1991:79)



- (4) a. atom, atom-ic (1), atom-ic (1) -ity (1)
 b. atom, atom-less (2), atom-less (2) -ness (2)
 c. *atom-less (2) -ity (1)
 (Plag 2002:285)

LOHは派生語の容認性を捉える理想的な方法であると当初見られていたが、その後、様々な問題が含まれていることが指摘されている。以下に、その問題点を述べてみたい。

まず、レベルの意味や定義が明確でない点が指摘される。高橋 (1992:56) は、「レベル1の接辞が基体の強勢移動 (stress shift) を生じさせ、語幹 (stem)²に

2 Allen (1978:3-5) は、語幹から形成される語 (e.g. in-sipid, in-ert) を "stem-based complex words" として語形成規則に位置づけている。

付加するのに対して、レベル2の接辞はその強勢移動に関与せず (stress-neutral)、語のみに接辞が付加する」という Allen (1978:6) の定義³には次のような反例が存在することを指摘する。

- (5) a. *ádequate* → *inádequate*, *efficient* → *inefficient*,
 expérienced → *inexpérienced*, *fórmal* → *infórmal*
 b. *bíograph* → *biógrapher*, *phótograph* → *photógrapher*
 c. *wilder-ness*, *grue-some*, *ful-some*, *hap-less*, *reck-less*

(5a) は *in-* がレベル1の接辞でありながら基体の強勢移動を生じさせず、(5b) は *-er* がレベル2の接辞でありながらその強勢移動を引き起こし、(5c) は *-ness*, *-some*, *-less* のレベル2の接辞が語よりも小さな語幹に付加する反例である⁴。

Plag (2002:286) や Hay and Plag (2004:568) は、LOHにおけるレベル分けの背後にあるものが明確でないことを指摘する。レベルの決定は語源的なものでも音韻的なものでもなさそうである。仮に、語源的なものが背後にあるとしても幼児の言語習得過程に語源学習の機会とは与えられないし、ア priori にその知識をもっているという報告もなされていない。例えば、*-hood* は基体に英語本来の語を取り、ラテン系の語は取らないと言ったことは教えられていない (e.g. *child-hood*, **governor-hood*)。仮に教えられるとしても、*parenthood*, *statehood*, *nationhood* のようにラテン系の基体に付加する例外もあり、学習す

3 Class I affixes (prefixes and suffixes): 1) are stress-determining (i.e. the presence of the affix is crucial to the operation of the stress rules) 2) can attach to stems (i.e. non-lexical roots, as in *de-scent*, *a-scent*) Class II affixes (prefixes and suffixes): 1) are stress-neutral (i.e. the presence of the affix has no effect on the operation of the stress rules) 2) attach only to words (i.e. to lexical roots)

4 (5c) は、Strauss (1982:45) の例であるが、Strauss (1982:28) は *hap-less* (不運な) の語幹の *hap* である *happ-y* の *-y* をクラス (=レベル) 2の接辞として捉えている。一方、Siegel (1974:107) は、*-y* をクラス1の接辞として分類している。このように、*-y* 接辞の捉え方は異なるが、いずれにしても (5c) のような特異な例は、すべて辞書の中に登録されていると考える。

るには複雑である⁵。レベルを二分割する音韻的な根拠は、第一に基体と派生語間の強勢の有無であるが、個別に見ると接辞そのものや基体に対する分節的变化 (segmental change)⁶ はレベルを2つにまとめられないほど様々な形態があり、2つの接辞として同じパターンは見られないと主張するのは Raffelsiefen (1999) である。このように、接辞は音韻規則と連動するものの実質的には二分割できない連続体として捉えられる⁷。

次に LOH で問題となるのは、今述べたことと大いに関連し、接辞を定義に従って二分割できないことを避けるために講じるレベルの二重性 (durity) というアドホックな手法である。接辞に2つのレベルを仮定する方法は、Aronoff (1976:121-128), Selkirk (1982:104-106) などで議論されているが⁸、ここでは -ment の接辞の二重性を見てみよう。

Aronoff (1976:54) は (6) の -mental の派生語に容認性の違いが見られることから -ment は X_v ment の内部構造をもつ場合 (e.g. *employment) は、否定制限⁹が働き、-al 付加が阻止されると仮定する。

| | | | |
|-----|-----------|---------------------|-------------|
| (6) | ornament | *orna _v | ornamental |
| | excrement | *excre _v | excremental |

5 一般的に、ラテン系の接辞や基体のあとにゲルマン系の接辞は付加できるが (e.g. tonicness, solemnly, container)、ゲルマン系の接辞や基体のあとにラテン系の接辞は付加できない (e.g. *homelessness, *shortity, *bookic) と言われている (Giegerich 1999:12)。

6 母音で始まる接尾辞は子音で始まる接尾辞よりも基体と一体化する傾向がある。分節的变化として、摩擦音化 (spirantization) (e.g. decide → decision, insert → insertion) や軟口蓋音軟化 (velar softening) (e.g. electric → electricity) が生じる。

7 Hay (2003:156) は語の解析性 (parsability) に関連して、音素配列的な接続 (phonotactic juncture) は同じ接辞の組み合わせでも異なることを主張している (e.g. discernment vs. government)。この点でも接辞は二分割できないことが分かる。

8 さらに二重性の問題に関する詳細な議論は Szypra (1989:45-62), Giegerich (1999:15-65) を参照のこと。

9 Aronoff (1976:55-62) は否定制限を阻止現象 (blocking) として一般化しようと考えていた。しかし、-al 接辞に関しては否定制限を語形成に課される個別条件として捉えている。

| | | |
|-------------|--------------------|----------------|
| regiment | *regi _v | regimental |
| fragment | *frag _v | fragmental |
| employment | employ | *employmental |
| discernment | discern | *discernmental |
| containment | contain | *containmental |
| derangement | derange | *derangemental |

ornamentalが阻止されないのは*ornaの語幹に-mentが付加するので否定制限に抵触せず、-al付加が可能となる。LOHの立場から見ると、ornamentの-mentはレベル1で、employmentの-mentはレベル2ということになる（強勢移動が生じないことに注意）。ここに、レベルの二重性という問題が生まれる。さらに、governmentalやdevelopmentalのようにX_vmentのあとに-alが付加する例外が存在することをAronoffは認めている。いわゆるレベル順序づけのパラドックスという問題で、次にこの問題を検討してみよう。

LOHは(4)のように接辞の組み合わせを順序づけによって説明しようとした。ところが、派生語の中に接辞の順序づけを満たしていないにもかかわらず(7)のように生成される語が見出される¹⁰。

- (7) a. government (2) al (1), development (2) al (1)
 b. standardize (2) ation (1), nationalist (2) ic (1)
 c. un (2) grammatical (1) ity (1), analyzabil (2) ity (1)
 d. set theoretical, wind instrumental, root parasitic, cross-sectional, twenty-fifth, lord mayoral, folk etymological, lieutenant-colonelcy

Aronoff (1976:54) は注のところで、governmentには動詞から派生された「支配」の意味と、X_vmentのように語彙化した「政府」の異なる意味があり、gov-

10 (7) は、Kiparsky (1983:21-22) からの引用例に接辞のレベルを付加した。(7d) はレベル2で複合語が形成されたあとにレベル1の接辞が付加するので順序づけパラドックスが生じる。本節では、(7a) の問題だけに焦点を合わせる。順序づけパラドックスに関するその他の議論については荒木 (1989), 大石 (1988:198-204), Sproat (1985:15-65), 高橋 (1992:56-59) などを参照のこと。

ernmentalは後者の「政府的な」の意味しか持ち合わせていないと述べている。この意味では、governmentalの-mentはレベル1となりLOHの分析でもパラドックスは生じてこない。問題は、developmentalの派生に関してで、Aronoffはgovernmentalの派生と同じことが言えるのか分からないとしている（Whether the same can be said of *development* I do not know, as its exact meaning is not clear to me.）。

Goldsmith (1990) は、-mentalの派生が開放接続 (open juncture) をまたぐ強勢衝突 (stress clash) の有無を見ることによってdevelopmentalの派生が許されるのを説明できると言っているが、Hay (2003:172) が指摘するように*discouragement_{al}や*nourishment_{al}は強勢衝突が無いにもかかわらず、容認できないのはなぜかが説明できない。おそらく、developmentalは「開発的 (な)、発生の」意味があることからdevelopmentは-alの範疇選択 (category-selection) を満たすようにlexical Nに語彙化し、レキシコンの中であらかじめ登録されているものと思われる¹¹。

Hay and Plag (2004:567) は、LOHは (4c) のように、異なるレベル間における順序づけは説明できるが、同じレベル間においては (4a, b) のようにatomicity, atomlessnessが許されるものの、(8) で見ると*consciousnesslessのように派生が許されない場合があり、順序づけにはどのような可能な組み合わせがあるのか、あるいはどのような不可能な組み合わせがあるのかについては何も言っていない点を指摘する。これは、同じレベル間だけの問題ではなく、異なるレベル間においてもLOHは接辞の正しい組み合わせについては何も言っていないのが実情である。このあと、3節で展開するFabb (1988), Hay (2002, 2003), Aronoff and Fuhrhop (2002) の分析の中でこの点を明確にするが、高橋

11 Goldsmithによるとdevelop+mentの開放接続は-mentの前に有り、したがって、dévelopと-méntalの強勢衝突は生じて来ないと仮定する。しかし、discourage, nourishと-méntalは強勢衝突しないがdiscouragement_{al}, nourishment_{al}は容認されない。逆に、judge, départと-méntalは強勢衝突するがjudgement_{al}, department_{al}は容認される。したがって、これらの派生語の容認性を正しく説明するには、強勢衝突とは別の捉え方が必要になる。

(1987, 1988) は LOH の過剰生成の問題として早くからこの点に気づいていた。以下、高橋 (1992:60), Takahashi (1992:184, 186, 188) の例をもとに LOH の問題点を指摘する。

- (8) a. *firmness (2) ful (2), *movement (2) ful (2), *puzzler (2) ful (2)
 b. *conscious (1) ness (2) less (2), *involvement (2) less (2),
 c. *cleavage (2) ed (2), *Darwinism (2) ed (2), *payment (2) ed (2)
- (9) a. *compárab (2) ly (2), *preférab (2) ly (2), *repáirab (2) ly (2),
 b. *cultivatab (2) ly (2), *operatabl (2) ly (2), *toleratab (2) ly (2)
 c. *baddish (2) ness (2), *oldish (2) ness (2), *shortish (2) ness (2)
 d. *baddish (2) ly (2), *oldish (2) ly (2), *shortish (2) ly (2)
 e. *analyzab (2) ly (2), *eatab (2) ly (2), *obtainab (2) ly (2)
 f. cf. cómparab (1) ly (2), tolerab (1) ly (2), selfish (2) ness (2), girlish (2) ly (2), advisab (1) ly (2), considerab (1) ly (2), laughab (2) ly (2)

括弧内の数字が示すように接辞の組み合わせとして順序づけを満たしているので LOH に従うと、(8) (9a-e) の例を誤って生成することになる。過剰生成とは、このように接辞の順序づけを満たしているがその派生がストップされないうで過剰に生成されることを意味する¹²。ちょうど、先の順序づけのパラドックスとは逆の関係にある。

(8a) の -ful 接辞に関しては個別に働く制約がある。Siegel (1974:173) は基体の名詞が "final stress" をもつことを条件とする。この条件には、Siegel 自身、wórshipful, púrposeful, sórrowful という例外を認め、さらに pówerful, méaningful, wónderful のような反例が見つかる。面白いのは、*mourningful, *forgettingful, *resentmentful, *inventionful の派生に関してである。Siegel (1974:173-174) は、mourning, forgetting は統語部門で派生されるので、-ful 接

12 過剰生成形態論 (Overgenerating Morphology) は、Allen (1978:195) の立場で実際に生じない語をもとに派生を促す方法を言うが、ここで使用する過剰生成という意味は、その意味とは異なる。LOH が実際に生じない語を誤って過剰に生成させることを意味する。

辞が語彙部門にアクセスできず、*mourningful, *forgettingfulが排除されると仮定する¹³。一方、resentmentやinventionはresent, inventの動詞から派生されると仮定する。いずれにしても、-fulの"final stress"の条件を満たすために例外的にmournful, forgetful, resentful, inventfulの動詞に-fulが付加する例が生まれる。Siegelはこのような音韻条件を満たす強勢付与は-ful接辞化の前に適用され、本質的に全体的(global)である必要はなく、-fulの下位範疇化よりも"final stress"の音韻条件が優先されると考える(Siegel 1974:174)。

Siegelの-fulの音韻制約を仮定すると、(8a)はLOHの反例にならないかもしれない。しかし、上で述べたように"final stress"を満たさない例外も多いので-fulの選択制限としてはFabb(1988:532)が提示する「すでに接辞化された語には付加しない」という制約の方が簡潔な記述ができるものと思われる(3.1節の議論を参照)。

(8b)の-lessに関して、Fabb(1988)は個別の制約を認めていない。理由は分からないが、-fulと同じように「すでに接辞化された語には付加しない」という制約を与えれば、(8b)はLOHの反例にはならないだろう¹⁴。(8c)の-edに関してはFabb(1988)の-fulと同様にすでに接辞化された語には付加しない制約があり、Fabbのこの選択制限を用いればLOHの反例を回避することができる。このように見てくると、(8a-c)はLOHの問題ではなくなるかもしれないが、3節で議論するようにFabb(1988)の選択制限の捉え方自体に不備があり、

13 Siegelはmourning, forgettingを統語部門で生成し、名詞ではなくて動詞であると捉えているが、mourningは名詞として辞書に記載されており、forgettingも次のような動名詞の例があるので動詞ではなくて名詞として捉えるのが妥当であろう。(e.g. Forgetting her own misery and embarrassment she threw open the door. (BNCのsimple search))

14 Fabb(1984:246-247)は、Fabb(1988)とは違った分析をし、接辞をlatinate, native, neutralに分け、不都合な組み合わせとして、1) *LATINATE AFFIX inside NATIVE AFFIX, 2) *NATIVE AFFIX inside NATIVE AFFIX, 3) *NATIVE AFFIX inside LATINATE AFFIX, 4) *NEUTRAL AFFIX inside NATIVE AFFIXの4つの制限を仮定する。Fabb(1988)はFabb(1984)の考え方を踏襲しないで別の選択制限を用いて分析する理由はよく分からないが、本章では、Fabb(1984)の分析には立ち入らないでおく。

派生語全体を捉える制約としては一貫性がないものと思われる。

(9a, b) は、-ableのあとに副詞の-lyが付加する例である。Aronoff (1976:123-124) は、-ableには2種類の接辞があり、(9f) の *comparable* や *tolerable* は強勢移動や +At の切り取りの影響を受け +able (= レベル1) の接辞となり、(9a, b) の *comparable* や *tolerable* はそれらの影響を受けないので #able (= レベル2) の接辞になると仮定する。-able接辞の二重性の問題が生じてくるが、ここではその問題に立ち入らず、Aronoffに従い-ableにはレベル1・2の接辞があると仮定してみよう。副詞の-lyはレベル2の接辞なので、LOHは(9f) の *comparably* や *tolerably* の派生語をレベル1・2の順序づけに基づいて正しく生成できるが、(9a, b) の同じレベル間の派生に関してはレベル2・2の順序づけに従っているにもかかわらず、正しく生成することができない。ここに、LOHの問題が生じる。

同様に、(9c, d) の A-ish と (9f) の N-ish の派生を比較してみよう。A-ish の派生語には-nessや副詞の-lyの接辞を付加することはできないが (e.g. *oldishness, *oldishly)、N-ish の派生語のあとには-nessや副詞の-lyの接辞を付加することができる (e.g. selfishness, selfishly)。-nessや-lyはレベル2の接辞であり、-ishもレベル2の接辞なのでA-ishとN-ishのどちらの派生語に対してもLOHは同じレベル間の派生として-nessや-lyの付加を促すはずである。ところが、*A-ishnessと*A-ish-lyの派生語は許されないのでLOHは(9c, d) の派生語を正しく生成することができない。ここに、LOHの問題が生じる。

最後に、(9e) の V-able の派生について考えてみよう。-ableにはレベル1とレベル2の接辞があることを上で見た。その際に、レベル1の-ableの条件とし

15 Aronoff (1976:123-125) は、-ableがレベル1である証拠として基体が異形態を引き起こすということ (e.g. divisible, extensible)、in-に-ableが付加できるということ (e.g. indivisible, imperceptible, cf. *individable, *imperceivable) を挙げている。ここでも、レベル1の-ableに関しては *divisib(1)ly(2)*, *divisible(1)ness(2)*, *extensib(1)ly(2)*, *extensible(1)ness(2)* の派生は許されるが、レベル2の-ableに関しては **dividab(2)ly(2)*, **extendab(2)ly(2)*, **extendable(2)ness(2)*, **extendib(2)ly(2)* の派生は許されない。レベル2の-ableについてLOHで誤って派生させる問題が生じる。

て強勢移動や切り取り以外に、異形態やin-接辞との組み合わせが可能であるということも条件になる¹⁵。(9e)のV-ableの派生語は(10)に示すようにレベル1の-ableの条件をいずれも満たしていない。

- (10) *ánalyze* → *ánlyzable*, *éat* → *éatable*, *obtáin* → *obtáinable*
 **inanalyable*, **ineatable*, **inobtainable*

したがって、(10)の-ableはレベル2であることが分かる。同様に、(9f)の例についてV-ableのテストを試みよう。

- (11) *advíse* → *advísable*, *consíder* → *consíderable*, *láugh* →
láughable, *inadvísable*, *inconsíderable*, **inlaughable*,
 **illaughable*, (cf. *unlaughable*)

(11)では強勢移動はV-ableの語に生じないが、*advísable*と*consíderable*にはin-が付加するので、これらの派生語の-ableはレベル1と見なされる。一方、*laughable*は強勢移動もin-接辞化も生じないのでレベル2ということになる。いずれにしても、副詞の-lyの接辞はレベル2に属するので、(9f)の派生語はレベル1・2とレベル2・2の順序づけにより*advísably*, *consíderably*, *laughably*を正しく生成できるが(9e)の派生語はレベル2・2の順序づけにもかかわらず*analyzably*, *eatably*, *obtainably*を正しく生成できない。ここに、LOHの問題が生じる。

以上、LOHの問題を述べてきたが、最後に問題点をまとめておく。

- (12) a. レベルの意味や定義が明確でない問題 (5)
 b. レベルの二重性の問題 (6)
 c. 順序づけパラドックスの問題 (7)
 d. 過剰生成の問題 (8) (9)

3. LOH 以後の分析とその問題点

LOH 以後、派生語の組み合わせに関する一般制約として提案されたものに、Fabb (1988) の選択制限 (以後、SR 分析という)、Hay (2002, 2003) の複雑性に基づく順序づけ (以後、CBO 分析という)、Aronoff and Fuhrhop (2002) の単一語基制約 (以後、MC 分析という) がある。本節では、これらの分析を順に紹介し、問題点を指摘する。

3.1 Fabb (1988) の SR 分析

Fabb は、43 個の接辞の組み合わせを説明する次の 4 つの選択制限を仮定する¹⁶。

(13) a. すでに接辞化した語には決して付加しない接尾辞

(Group 1: Suffixes which Never Attach to an Already-Suffixed Word (28 out of 43))

e.g. -age (V/N-S, N-F) -al (V-S, N-F), -an (N-S, N/A-F), -ant (V-S, N/A-F), -ance (V-S, N-F), -ate (N-S, V-F), -ed (N-S, A-F), -ful (N/V-S, A-F), -hood (N-S, N-F), -ify (N/A-S, V-F), -ish (N-S, A-F), -ism (N-S, N-F), -ist (N-S, N-F), -ive (V-S, A-F), -ize (N-S, V-F), -ly (N/A-S, A-F), -ment (V-S, N-F), -ory (V-S, A-F), -ous (N-S, A-F), -y. (N-S, A-F; V/N-S, N-F)

b. 1 つの接辞を除き付加しない接尾辞 (Group 2: Suffixes which Attach Outside One Other Suffix (6 out of 43))

e.g. -ary (N-S: -ion, N/A-F), -er (N-S: -ion, N-F), -ic (N-S: -ist, A-F), - (at) ory (V-S: -ify, A-F), -y (A-S: -ent, N-F)

16 説明の都合上、Fabb (1988) の選択制限を Plag (1996) に従い 4 つのグループに分けている。(13a) をグループ 1、(13b) をグループ 2、(13c) をグループ 3、(13d) をグループ 4 と呼ぶ。グループ 1 は Fabb が取り上げる 43 個の接辞の内、28 個が該当する。-age (V/N-S, N-F) は、動詞・名詞を選択し (Category-selection, e.g. steer-age, orphan-age)、名詞を形成する (Category-forming) の意味で使用する。他のグループに関しても同じである。

- c. 自由に付加する接尾辞 (Group 3: Freely Attaching Suffixes (4 out of 43))
 e.g. -able (V-S, A-F), -er (V-S, N-F), -ness (A-S, N-F), -en (A-S, V-F)
- d. 問題のある接尾辞 (Group 4: A Problematic Group of Suffixes (6 out of 43))
 e.g. -al (N-S: -ion, -ment, -or, A-F), -ion (V-S: -ize (both), -ify (both), -ate, N-F), -ity (A-S: -ive, -ic, -al, -an, -ous, -able, N-F), -ism/-ist (A-S: -ive, -ic, -al, -an, N-F), -ize (A-S: -ive, -ic, -al, -an, V-F)

Fabb (1988:528-530) によると、43個の接辞の組み合わせとして無制限に1849通りの可能性がある。それを範疇選択の制限により663通りの組み合わせの数に絞ることができる。さらに-fulや-alの基体に対する"final stress"の個別の条件や、-enの基体の形容詞に課される単音節の条件と接辞のレベル順序づけを考慮に入れると、459通りの接辞の組み合わせに減じることができる。しかし、実際に接辞の可能な組み合わせは50通りぐらいしかないので、さらに400通りの接辞の組み合わせを排除しなければならないと主張する。そこで、400通りの排除の方法として、Fabbは(13a-d)の4つの選択制限を仮定する。Fabbはこれらの制限により、さらに不可能な接辞の組み合わせをどれぐらい減じることができるのかについては何も述べていないが、LOHよりも記述的妥当性が高くなると思われるのは次の派生語に関してである (Fabb 1988:533)。

- (14) *derivable(2)-ify(1), *person-al(1)-ify(1),
 *destruct-iv(1)-ify(1)

LOHは(14)におけるderivable-ifyを正しく排除することができるが、personalify, destructivifyは同じレベル1の接辞の組み合わせなのでその順序づけによって排除することができない。一方、Fabbの説明によると-ifyの接辞は(13a)のグループ1に属し、すでに接辞化を受けた語には付加しない選択制限をもつ。したがって、(14)の3つの例はこの選択制限に抵触し正しく排除することがで

きる。Fabbのすでに接辞化を受けた語には付加しない選択制限は(14)の例と共に(8)の例も統一的に説明できるが¹⁷、(9a-e)の-lyや-nessの容認できない派生語に対しては正しい予測ができないので問題が生じる。

Fabb (1988:532)は形容詞の-lyは(13a)のグループ1に属する接辞とみなしているが、副詞の-lyについては何も言及していない。副詞の-lyは-nessと同様に生産性の高い接辞なので(13c)のグループ3に属すると仮定してみよう。グループ3は接辞の制限はなく、範疇選択を満たせば自由に付加できるタイプであるが、(15)に見られるように-ness派生語と-ly派生語の容認性を拒む何らかの制限が見られる¹⁸。

- (15) a. *coolishly, *coolishness, *loudishly, *loudishness,
*sharpishly, *sharpishness, cf. foolishly, foolishness, childishly,
childishness, sheepishly, sheepishness.
b. *buildably, *buidableness, *describably, *describability, *return-
ably, *returnableness, *tellably, *tellableness, cf. readably, readable-
ness, indescribably, indescribability, determinably, determinable-
ness, availably, availableness.

(9) (15)において、容認されない諸例はLOHやSR分析により、誤って正しいと予測される。なぜなら、それらは順序づけや選択制限を満たしているからである。*A-ish-ly, *A-ish-nessが排除され、N-ish-ly, N-ish-nessの派生が許されるのはなぜか。V-ably, V-ablenessの派生に容認性の違いが見られるのはなぜか。

FabbのSR分析は、-lessや副詞の-lyについての言及が無いことを先に述べたように、接辞全体を捉えた分析ではない。また、接辞の組み合わせを説明する上で、効果を発揮すると思われる(13a)の選択制限に対して、28個の接辞がそ

17 (8a, b)に関しては、2節で言及したように-fulと-lessをグループ1の接辞と仮定している。

18 ここでは、(9)に挙げたものとは異なる例を取り上げている。また、(15)の例は、Hay (2003)で主張する音素配列的な制約に影響されないように-ishや-ableの前の音を統一している。

ここにリストアップされる根拠は何か、接辞化された派生語に付加しないというのは原理的にはどういうことを意味するのか。(13b)の選択制限に対して、なぜ1つの接辞だけが継承されるのか。選択制限の理論的な位置づけやそれを動機づけるものが分からないといった問題が生じる(高橋 1992:61, Plag 1996:789, Plag 2002:288, Aronoff and Fuhrhop 2002:454)。

Plag (1996)の論文で、FabbのSR分析が妥当かどうかを検証するために広範囲の接辞が検討されている。Fabb (1988)のSR分析の問題として、(13)の選択制限の条件を満たさない接尾辞の問題をPlag (1996)の指摘をもとに取り上げる。(13)の選択制限は、43個の接辞がその4つの基準に従ってグループ分けされたものであるが、接辞の中に基準を満たさないものが多く見られる¹⁹。

- (16) Group 1: absenteeism, loverhood, consumerist, meaningful, teacherly, kingdomed, computerize
 Group 2: conveyancer, concordancer
 Group 3: *resembler
 Group 4: concordantial, presidential, secretarial

(16)において、グループ1の接尾辞はすでに接辞化した語には決して付加しない選択制限を受ける。-eeism, -erhood, -erist, -ingful, -erly, -domed, -erizeに見られるように-ism, -hood, -ist, -ful, -ly, -ed, -izeがこの選択制限をもつにもかかわらず、接辞化した派生語のあとに付加されている。グループ2の接尾辞は1つの接辞だけを継承する。-erは、(13b)に示すように名詞由来の接尾辞で-ion (e.g. vacationer)だけを選択するとFabbは捉えるが、-anceの接辞もその対象になる。グループ3の接尾辞は範疇制限を満たすと自由に付加できるが、動詞由来

19 Plag (1996)のFabb (1988)に対する反例の多くは、"bound roots"が含まれている。Fabb (1988:528)は、語に付加する接辞だけ取り上げ、Aronoff (1976)の語に基づく形態論を念頭においているので、"bound roots"の反例は実際にはFabbの問題とにならない。この節では、"bound roots"を含まず、Fabbにとって真に問題となる反例を取り上げる。

の-erはどんな動詞でも付加できないことが指摘される²⁰。グループ4の接尾辞は問題のある接辞で、Fabbは-alが-ion, -ment, -orの接辞の基体を継承することを認めているが、(16)ではさらに-ant, -ent, -aryの接辞のあとに-alの接尾辞が付加する例をPlagは追加している。ここまでのFabb (1988)のSR分析の問題点をまとめると次のようになる。

- (17) a. 選択制限では容認性が説明できない問題 (15)
- b. 選択制限のグループの位置づけが明確でない問題
- c. 選択制限の基準を守らない接辞の問題 (16)

(17c)の問題に対し、部分的ではあるがPlag (1996)は対処法を考える。Plagのアプローチは、基本的にはFabbと同じでLOHのレベルを排除し、形態的・音韻的・意味的な接辞の制限をレキシコンに指定することにより多くの接辞の組み合わせが説明できると考える。FabbとPlagが違うのは、接辞の組み合わせに係る制限としてFabbが接辞側から基体の制限 ("affix-driven" restriction)を見るのに対し、Plagは基体側から接辞の制限 ("base-driven" restriction)を見る点である。Plag (1996)の分析はFabb (1988)の分析より好ましいかどうかを最後に指摘したい。

Plag (1996)は、グループ1の接尾辞の中で、動詞から抽象的な名詞を形成する5つの接辞、-age (e.g. steerage), -al (e.g. betrayal), -ance (e.g. annoyance), -ment (e.g. containment), -y (e.g. assembly)に特に注目する。これらの接辞は、-ify, -ize, -ateの接辞で終わる動詞には(18)に示すように付加することができない。

20 Plagは、-erの接尾辞に何らかの制約が必要であり、自由に付加できない点を指摘する。-erはどんな動詞でも付加するのではなく、中島(1995:66)で指摘するように主語として行為者(agent)を表すNPを取るような行為動詞(agentive verbs)に-erが付加する意味条件が働くものと思われる(e.g. *liker, *happener, *seemer, *understander)。さらに、項構造との関連で-er名詞形が可能かどうかという議論については岡崎・小野塚(2001:144-146)を参照のこと。

| | | |
|-------------------|-----------------|-------------------|
| (18) *magnify-age | *verbalize-age | *concentrate-age |
| *magnify-al | *verbalize-al | *concentrate-al |
| *magnify-ance | *verbalize-ance | *concentrate-ance |
| *magnify-ment | *verbalize-ment | *concentrate-ment |
| *magnify-y | *verbalize-y | *concentrate-y |

Plag (1996:776-777) は、-ify, -ize, -ate の接辞が唯一 -ation の接辞を選択できることから (e.g. magnification, verbalization, concentration)、(18) の事実を説明するには名詞の接尾辞に与えられる選択制限と見るよりも、動詞の接尾辞に与えられる選択制限として捉える方がより一般的な記述ができることを主張する。前者の方法は名詞の接尾辞側から基体を見る選択制限なので、(18) の諸例は (13a) の選択制限により説明できるものの、-ation が動詞の接尾辞を選択する事実を捉えることができない。一方、後者の方法は -ify, -ize, -ate の基体の動詞側から見る選択制限なので、これらの接辞は -ation だけを選択するという簡潔な記述が与えられれば、magnification, verbalization, concentration などの派生語が可能になるという事実と (18) の諸例が排除されるという事実を同時に捉えることができる。Plag の "base-driven" に基づくアプローチは、確かに -ify, -ize, -ate の接辞のあとに継承されるものが -ation の名詞接尾辞だけに絞られるので、(18) の事実に対して簡潔な記述ができるように思われるが、これとは逆に、名詞の基体を選択する -al 接辞の場合はそのような簡潔な記述ができないように思われる。なぜなら、Fabb (1988:536) は (13d) で -al と組み合わせの可能な接辞として -ion, -ment, -or を挙げているが、Plag (1996) はさらに -al 接辞が -ance, -ant, -ary, -cide, -ence, -ent, -ive, -ory, -ure を継承することができることを主張する²¹。この場合に -ify, -ize, -ate の接辞のように基体から接辞付加の可

21 Plag (1996:791) は、論文の中で Fabb は -ion, -ment, -or の3つの接辞しか -al は付加しないと述べているが、実際は -ure (e.g. cultural), -ent (e.g. presidential), -ant (e.g. consonantal), -ance (e.g. concordantial), -ence (e.g. conferential), -cide (e.g. insecticidal), -ary (e.g. secretarial), -ive (e.g. substantival), -ory (e.g. laboratorial) の9つの接辞が追加されなければならない点を指摘する。しかし、-ure, -ant, -ive の例は "bound roots" である。19の注で述べたように "bound roots" は Fabb にとって問題とならない。

能性を見ると、-ion, -ment, -or, -ance, -ant, -ary, -cide, -ence, -ent, -ive, -ory, -ure は-alを選択するという複雑な記述をすることになる。Plagの"base-driven"に基づくアプローチは断片的に捉えているだけで、どの接辞に対してその制限が働きその根拠は何か明確ではないし²²、-al接辞の場合はむしろ"affix-driven"に基づく方が簡潔な記述ができるのではないかという疑問さえ生じる²³。

3.2 Hay (2003) のCBO分析

HayはLOHのように接辞を二分割する立場を取らない。その根拠は、同じ接尾辞であっても解析性(parsability)が異なると考えるからである。例えば、tastelessとlistlessの派生語を比較した時に、同じ-lessの接尾辞をもつにもかかわらず、tastelessの解析性が高く、-lessの前に強い接続(a stronger juncture)があると捉える。Hayは語の解析性に影響を与えるものとして次の2つの要因を仮定する²⁴。

- (19) a. 語彙前過程 (pre-lexical processing) における音素配列論 (phonotactics) に係る要因
- b. 語彙過程 (lexical processing) における相対的頻度

22 Plag (1996:789) は他にも基体に基づく選択制限を取る接辞について言及している。
-istは-icだけを"base-driven"に選択するため-isticの派生が許され、*-ist-al, *-ist-ive, *-ist-entの派生が許されないと説明する。

23 本節は、Plag (1996) の不備を指摘するのが目的ではないが、PlagがFabbに対する反例として"bound roots"を挙げている以外に、歴史的に廃語となっている語 (obsolete) や現在では稀にしか使用しない語 (rare) を反例に挙げている。音韻変化など通時的視点が必要な場合もあるが、語の容認性や生産性は共時的視点で捉えられるものであり、接辞の組み合わせとしては現代英語に絞った記述が必要であると思われる。Plag (1996:778-779) は-en接辞に課される制限として、-ify, -ize, -ateの接辞とは異なり、*-enationを説明するのに"Latinize Constraint"を、*-enanceと*-enalを説明するのに"final stress"をもつ動詞の基体を、*-enageと*-enyを説明するのに-ageと-yが語彙的に支配される (lexically governed) という捉え方をする。したがって、"base-driven"に基づく-ify, -ize, -ateの説明と異なり複雑さが-en接辞には見られる。

24 Hay (2003:158) は、解析性に影響を与える要因は (19) 以外にも、音韻的・意味的な透明性 (transparency) などがあることを認めている。

(relative frequency) に係る要因

(19a) の要因は音素配列に基づく考え方で、同じ接尾辞をもつ派生語でも、音素配列的に不合理な音素移動 (illegal phoneme transitions) が生じると、形態的に接続が生じて解析性が高まり、派生語の内部構造を分解 (decompose) する。例えば、Hay (2003:155) は、pipeful は bowlful より不合理な音素移動 (すなわち、[pf]) をもつので pipeful は bowlful より分解されやすいと指摘する。(19a) の要因は接尾辞を組み合わせたときにその接尾辞が母音で始まるか (e.g. -al, -ess, -ian)、子音で始まるか (e.g. -ful, -hood, -ness) により、解析性が異なる。例えば、Hay (2003:156) は、-ness は子音で始まる接尾辞なので母音で始まる -ess より基体との接合 (具体的には、morpheme boundary) において不合理な音素移動となる傾向があり、解析性が高くなると捉える。さらに、母音で始まる接尾辞が強勢移動に対し中立的 (e.g. -er) かそうでないか (e.g. -ity) により、解析性は異なると捉える。Hay の解析性について Plag (2002:291) のまとめを引用すると、母音・子音で始まる接尾辞の解析性の階層は (20) のようになり、(20a-c) の順に解析性が高まる。

- (20) a. V-initial non-neutral suffixes, strong whole word bias
 b. V-initial neutral suffixes, weak whole word bias
 c. C-initial, strong parsing bias

次に、語の解析性に影響を与える (19b) の相対的頻度の要因について見てみよう。Hay (2003:156) は discernment と government は同じ -ment の接尾辞をもつが、-ment の基体動詞 (e.g. discern) の頻度 (frequency) が派生語 (e.g. discernment) の頻度より高いので解析性が高くなり、逆に -ment の基体動詞 (e.g. govern) の頻度が派生語 (e.g. government) の頻度より低いので解析性も低くなることを指摘する。具体的には、(21) の派生語の頻度数を基体の語の頻度数で割った相対的頻度 (relative frequency) として捉えられる。

(21) 相対的頻度： $f_{\text{relative}} = f_{\text{derivative}}/f_{\text{base}}$

すなわち、相対的頻度の数値が高くなれば全体として語として認識される結果、解析性が低くなり (e.g. *insane*)、相対的頻度が低くなれば基体に依存する活性化 (the resting activation of the base) が派生語に依存する活性化より高くなるので、内部構造を認識し解析性が高くなる (e.g. *infirm*)。Hay は相対的頻度が語の生産性・音素配列・意味の透明性と相関関係があることを示している (Plag 2002:291)。

- (22) a. Low relative frequency correlates with high productivity
 b. Low relative frequency correlates with bad phonotactics
 c. Low relative frequency correlates with high semantic transparency

Hay の CBO の分析は、語の解析性が (19) の2つの要因に影響されることを心理言語学的に実験データに基づき立証したものである。結論として、Hay (2003:184) は語の容認性が (23) の解析性の順序づけにより決定されると仮定する。

- (23) 解析されやすい接辞は解析されにくい接辞の内部に生じることはできない (An affix which can be easily parsed out should not occur inside an affix which can not.)

(23) は言い換えると、解析されにくい接辞 (すなわち、内部構造が複雑でない接辞) が派生語の内側に来て、解析されやすい接辞 (すなわち、内部構造が複雑な接辞) が派生語の外側に来るので、複雑性に基づく順序づけ (complexity-based ordering, Plag 2002:290) と呼ばれる。(23) の CBO は、束縛語根 (bound roots) や音韻的不透明 (phonological opaque) の基体が解析されにくい接辞なので、束縛語根や音韻的不透明な基体が派生語の内側に生じることがうまく説明できる。したがって、(24a, b) (25a, b) に見られる容認性の違いも

これらの要因に伴う形態的な接続が派生語の内側に生じるか生じないかによりうまく説明できる²⁵。レベル順序づけ仮説やFabbの分析では説明できない(24)(25)の派生語に対して、(23)のCBOはレベルや選択制限を用いないで接辞の可能な・不可能な組み合わせを予測できる点でLOHやSRの分析より記述的妥当性があると思われるが、以下に述べる問題が指摘される。

- (24) a. pastoral, mayoral, ambassadorial, tutorial, manorial.
 b. *conductorial, *directorial, *sailorial, *ejectorial.
- (25) a. adjectival, relational, substantival
 b. *collectival, *conservational, *actival, *digestival,
 *preventival, *protectival, *selectival

まず、(19a)の音素配列に係る(20)の問題を考察する。Plag(2002:293)は、-abilityの-ableと-ityの接尾辞の組み合わせは(20)の解析性の階層に矛盾することを指摘する。なぜなら、-ableは強勢移動を引き起こさない(20b)の階層をもつが、-ityは強勢移動を引き起こすので(20a)の階層をもつ。それゆえに、-ityが-ableよりも解析性が低くなる。したがって、-able-ityの解析性は解析されやすい接辞(i.e. -able)が、解析されにくい接尾辞(i.e. -ity)の内部に生じることになり、(23)の解析性の順序づけに矛盾する。Plagの指摘は、実際には-ableが-ityを生産的に継承し、-abilityと-ableの接辞が分節的变化を生じさせていることから考えると、2つの接辞の組み合わせと捉えるよりも動詞の基体を範疇選択する1つの複合接辞と捉えることにより解決できるかもしれない²⁶。

25 Hay(2003:174)は、(24b)の-or(i)alの前と(25b)の-ivalの前に形態的接続が生じるため、それが生じない(24a)(25a)には-al付加が許されるが(24b)(25b)には-al付加が許されないと説明する。具体的には、(24a)の派生語における-or(i)alの前の要素と(25a)のadjectivalにおけるadjectが束縛語根となり、relativeとsubstantiveが音韻的に不透明になるため-al付加が許される。

26 -abilityは動詞の基体を範疇選択する(e.g. desirability)が、名詞の基体を範疇選択しない(e.g. *comfotability)と、言われている(Chapin 1970:57)。

Plag (2002:293) が指摘する音素配列に係る2つ目の問題は、名詞を基体に取り-alと-ationの接尾辞の組み合わせに見られる。これらの接尾辞の派生語、sensationalとcolonializationを比較してみよう。sensationalは-alが-ationのあとに来ている。一方、colonializationは-alが-ationの前に来ている。(23)のCBOに従うなら、sensationalは-alが-ationより解析しやすい接尾辞となり、colonializationは-alが-ationより解析しにくい接尾辞となる。同じ接尾辞の-alが解析性において異なる見解をもつのは問題である。-abilityと同様に、-izationの-izeは(20b)の接尾辞で-ationは(20a)の接尾辞なのでPlagは解析性の階層にも矛盾する組み合わせであると主張するが、-abilityと同じように-izationを複合接辞と仮定するならばこの問題は回避できるかもしれない。しかし、ここでは詳しく述べないが、Plag (2002:295-299) は子音で始まる接尾辞がいつでも母音で始まる接尾辞よりも生産性が高くなるとは言えない事実を指摘しており、(20)の音素配列と解析性には必ずしも相関関係があるようには思われない。

次に、(19b)の相対的頻度に関連する音素配列の問題を指摘する。Plag (2002:300) は、-ableと-izeの派生語についてBNCのコーパスをもとに調べた結果を報告する。両接尾辞とも母音で始まるので語全体を捉えるアクセスが語の処理過程において優勢になると思われるが、(20b)の予測に反して基体の頻度が派生語の頻度より高く、-ableに関しては90%が、-izeに関しては85%が接辞の基体を解析するという報告をする。この報告は、相対的頻度が高くなると語全体を捉えたアクセスをするということと矛盾することになる。同じような相対的頻度と解析性の矛盾は-alist, -ability, -izationの派生語にも見られる。Plagはこれらの派生に対して-alが-istを、-ableが-ityを、-izeが-ationを選択する"base-driven"アプローチを採用すれば問題は生じないと仮定するが、3.1節で指摘した問題はPlagに残される。

これまではPlag (2002) が指摘する語の解析性に係るHay (2003) のCBO分析の問題を見てきた。次に、Hay (2003) 自身が提供する実験から得られる結果と解析性の矛盾の問題を指摘したい。

Hay (2003:173) は-mentalの派生に関する(26)のデータを示す。

(26)

| base word | base frequency | derived word | derived frequency | In (base/der) |
|-----------|----------------|--------------|-------------------|---------------|
| discern | 84 | discernment | 4 | 3.04 |
| contain | 2244 | containment | 17 | 2.83 |
| derange | 43 | derangement | 12 | 1.2 |
| develop | 4492 | development | 3707 | .19 |
| employ | 1110 | employment | 967 | .14 |
| judge | 718 | judgment | 1053 | -.38 |
| govern | 340 | government | 7693 | -3.12 |

派生語の頻度が基体の頻度より高くなると相対的頻度数が上がり X-ment を派生語全体として解析する。一方、基体の頻度が派生語の頻度より高くなると相対的頻度数が下がり X-ment の内部構造を解析する。(23) の CBO は前者の場合に-al 付加を認め、後者の場合は-al 付加を認めなくなる。(26) において、相対的頻度数は下に向うほど高くなるので-al 付加の容認性も高くなることを示す。しかし、development と employment を比較すると、相対的頻度数は employment が development より高くなるので数値から判断すると employmental が developmental より容認性が高いことを予測する。辞書的には、むしろ逆で developmental は容認されるが employmental は容認されない。Hay はこの事実に気づいており、employmental は容認されないが相対的頻度の観点から見れば discernmental や containmental よりはるかに語らしく受け入れられるはずであると説明する。

Hay (2003:176) は相対的頻度と語らしさの (26) の関係を実験で確証を得るために Northwestern 大学の学部学生 35 人に (27) の X-ment の派生語に-al を付加した語が語らしく聞こえるかどうかのアンケートを行った²⁷。

27 実際に、アンケートの際に使用された言葉は次の英語である：This is an experiment about possible words. You will be presented with pairs of words, neither of which are actual words of English. Your task is to decide which sounds more like it *could* be a word of English. Read the two words silently to yourself, and then circle the word you think is more likely to enter the English language.

(27)

| Word A | freq. | base freq. | Word B | freq. | base freq. |
|---------------|-------|------------|---------------|-------|------------|
| arrangement | 1111 | 1587 | investment | 1294 | 525 |
| attachment | 196 | 878 | detachment | 133 | 99 |
| attainment | 153 | 234 | amendment | 163 | 83 |
| curtailment | 17 | 63 | bereavement | 21 | 0 |
| containment | 17 | 2244 | atonement | 27 | 15 |
| appeasement | 32 | 70 | infringement | 31 | 22 |
| enchantment | 26 | 115 | impeachment | 34 | 10 |
| embarrassment | 344 | 461 | advertisement | 346 | 277 |
| involvement | 418 | 3779 | appointment | 561 | 465 |
| settlement | 471 | 1428 | punishment | 629 | 421 |
| commitment | 743 | 958 | excitement | 690 | 207 |
| achievement | 713 | 2121 | equipment | 1352 | 179 |
| adornment | 41 | 75 | alignment | 57 | 44 |
| advancement | 77 | 944 | bombardment | 65 | 48 |
| commandment | 103 | 508 | recruitment | 103 | 102 |
| effacement | 1 | 13 | abasement | 6 | 2 |

(27) は Word A に基体の頻度が派生語の頻度より高いものをリストし、Word B に派生語の頻度が基体の頻度より高いものをリストしている。

実験結果は、全体の56%の人が Word B の基体の頻度より派生語の頻度が高くなる場合に -mental の派生が好まれ、44%の人が Word A の派生語の頻度より基体の頻度が高くなる場合に -mental の派生が好まれた。

この結果から言えることは、基体より派生語の頻度数が高い Word B に対して必ずしも -mental の派生が好まれるのではないということである。44%の人が Word A の語に -al が付加しやすいと捉えた事実は相対的頻度数が語らしさを決定する要因ではないと言える。また、実在の語ではない -mental の派生語の印象を尋ねることが可能な語のテストになるのかも疑問である。2節で -mental の派生を議論したように、Aronoff (1976) の $X_{\nu}ment$ の内部構造をもつ派生語には -al が付加しない否定制限が働き、(27) の派生語はすべてその制限に抵触し $X_{\nu}mental$ の派生が容認されない不可能な語と捉えるのが辞書的にも妥当であるように思われる。

最後に、(23) の問題を見てみよう。(23) のCBOは派生語の接辞の正しい組み合わせとして、解析されにくい接辞が解析されやすい接辞の内側に来ることを説明する。Hay (2003:160) は (28) の派生語が容認されない理由としてこのCBOの制約を関連づけている。

(28) ?girlishism, ?wholesomeism, ?helpfulness, ?peacefulness,

例えば、*helpfulness* が容認されないのは、Plag (1996:794) が指摘する *altruism* の存在が *helpfulness* の派生語を阻止する意味的な理由とは別個に、*help#ful* の音素配列上の原因があることを Hay は指摘する。言い換えると、解析されやすい接辞 (i.e. *-ish*, *-some*, *-ful*) が解析されにくい接辞 (i.e. *-ism*) の前に来ているため (28) の派生語が (23) のCBOに抵触し容認されないと捉える。CBOはうまく (28) の派生語の容認性を捉えるように思われるが、(29) の派生語に対して説明できない問題が生じる。

(29) *girlishly*, *wholesomely*, *helpfully*, *peacefully*

副詞の *-ly* は子音で始まるので *-ishly* は音素配列的にCBOに抵触しないのかもしれないが、*-fully* や *-somely* については音素配列的に矛盾が生じて来るように思われる。特に、*-fully* に関しては [li] と二重子音でなくなっているので音韻的に *opaque* となり、解析されにくい接辞が解析されやすい接辞の外側に来ることになり (23) のCBOの分析と矛盾する²⁸。

Hay (2003) のCBO分析の問題点をまとめると次のようになる。

- (30) a. 音素配列論の問題
b. 相対的頻度の問題

28 *girlishly* が音素配列的に問題は生じないとしても、2節で述べた *A-ishly* (e.g. **youngishly*) の派生に関して、なぜ音素配列的に問題がないのに容認されないのかという別の問題がCBOには生じてくる。

- c. 実験データの問題 (26) (27)
- d. CBOの問題 (29)

3.3 Aronoff and Fuhrhop (2002) のMC分析

Aronoff and Fuhrhop (以降、A&Fと略する) は英語とドイツ語の派生語の資料を調べている。本節では英語の資料についてのみ検討し、MCの分析とその問題を指摘する。

A&FはFabb (1988) のSR分析における (13a) の選択制限に注目する。

(31) = (13a) すでに接辞化した語には決して付加しない接尾辞

A&F (2002) はFabbの選択制限が単に接辞をリストアップしたもので体系的なものではないことを指摘する。A&F (2002:473) は、多くの資料を分析することにより (31) を (32) の単一語基制約 (Monosuffix Constraint) にまとめている。

(32) ゲルマン系の基体を選択する接尾辞は接辞化されていない基体を選択する (Suffixes that select Germanic bases select unsuffixed bases.)

(32) の単一語基制約は、ゲルマン系の接尾辞 (e.g. -dom, -ed, -ee, -en, -er, -ess, -ful, -hood, -ish, -less) に適用される制約で、ラテン系の接尾辞 (e.g. -able, -al, -ive, -ary, -ation, -ify, -ism, -ity, -ize, -or) には適用されない。したがって、ゲルマン系 (Germanic) とラテン系 (Latinate) という区別が重要視される。具体的には、(32) は (33) の接辞の組み合わせを説明する。

- (33) a. *-nessed, *-lessen, *-hoodful, *-domish, *-nessless
b. -ifiable, -tionary, -ization, -alism, -icize

(32) は (33a) に示すようにゲルマン系の接尾辞がゲルマン系の接尾辞を継

承しないという意味で、ゲルマン系の接尾辞はラテン系の接尾辞を継承しないという意味ではない。例えば、-erはゲルマン系の接尾辞であるがラテン系の接尾辞（e.g. -ify, -ize）を継承し classifier, harmonizer の派生語を生成することができる。ただし、A&F（2002:474）は-nessと-essは例外と考える。なぜなら、-nessは基体としてラテン系の接尾辞（e.g. -able, -al, -ive）とゲルマン系の接尾辞（e.g. -ful, -ish, -less）の両方に付加できるからである。-essは語源的にはラテン系の接尾辞であるが、ゲルマン系の基体を選択することから-eeと共にA&Fはゲルマン系の接尾辞として分析している。-essはラテン系の接尾辞（-or）を継承し、且つゲルマン系の接尾辞（-er）も継承するので-nessと共に（32）の例外として捉えている。しかし、英語の性（gender）の観念がなくなり男性・女性の区別をしなくていい語用論的な理由から今では-eeは生産性のない接尾辞とみなしている²⁹。

（32）の単一語基制約は派生接尾辞と同様に屈折接尾辞の組み合わせも制限させる制約としてA&F（2002:479-480）は発展させている。

- (34) a. *he lookeds, *he rangs (cf. men's, children's)
 b. How many dressings do you have
 c. I was surprised at John's and Mary's leaving (*s) .

（34a）の屈折接尾辞は、規則的な動詞の過去形（ed）と母音交替（ablaut）による不規則な過去形（i.e. ring→rang）のあとに3人称単数のsが付加したものである。A&Fは動詞の屈折に関しては規則的・不規則的の区別なく（32）が働き、名詞の複数形の屈折に関しては幼児がある時期にfeetsを生み出すようにmenやchildrenの不規則性を認識しなくなり（32）が働かないと仮定する。（34b）と（34c）は-ingが屈折と派生の曖昧性があり、（34b）のように派生接尾辞の-ingのあとに屈折接尾辞のsは付加できるが、（34c）のように派生語のleav-

29 A&F（2002:474）は-er-ess, -or-essの派生語は数百年前のもので新語は作られずwaitressのようにwaiterの-erが落ちる語中音消失（syncope）を受け、形態的に透明性が失われていると説明する。

ingにMary'sの所有格と複数形のsを同時に修飾させることはできない。まとめると(32)の制約は派生接尾辞も屈折接尾辞も同じ接尾辞同士を重複させることはできない(35)の接辞の組み合わせを規定したものである。

- (35) a. *ゲルマン系の派生接尾辞 + ゲルマン系の派生接尾辞
b. *屈折接尾辞 + 屈折接尾辞

A&F (2002:481) は -ly の接尾辞に言及し、形容詞の -ly は派生接尾辞で副詞の -ly は屈折接尾辞であると仮定する。同じ -ly の形をした接尾辞を派生・屈折と別の捉え方をするのは、A&F が (36a, b) の語の容認性の違いを (32) の制約で説明しようとするからである。

- (36) a. *quicklier, *quickliest
b. friendlier, friendliest

すなわち、(36a) の -ly は副詞で屈折接尾辞となり、-er と -est も屈折接尾辞であることから quicklier (-est) の語が (35b) の組み合わせに抵触し排除される。一方、(36b) の -ly は形容詞で派生接尾辞となり、-er と -est の屈折接尾辞を後続させても (35b) の組み合わせに抵触しないので friendlier (-est) が正しく派生できると説明する。さらに、A&F (2002:482) は not や助動詞が接語 (clitics) になると (i.e. *she'sn't, cf. she isn't, she's not; *she'lln't, cf. she'll not)、連続することができない a MONOCLITIC constraint に (32) を発展できる可能性を示唆しているが、(32) の制約には次のような問題が生じてくる。

1つ目の問題は、(34a) の *he lookeds と *he rangs の派生を (32) の制約で A&F が説明する点にある。A&F (2002:480) は動詞の不規則形が幼児の言語習得において clink を clunk に slay を slung にして生産的に生み出す過程に注目し、(34a) の動詞の屈折と名詞の屈折とは生産性が違うことを指摘する。すなわち、規則的・生産的な屈折接尾辞同士の重複が (32) の制約に働くと仮定する。不規則変化動詞の屈折を規則で導入するか、連想記憶 (associative memory) とし

でレキシコンに指定するかに関しては二分される議論があるが³⁰、(34a) の *lookeds*, *rangs* は屈折接辞の重複と見るよりも過去時制と現在時制の時制間のギャップが容認性を失くしていると単純に捉えた方が理解しやすいし、A&Fのように母音交替を接辞として捉えるのも無理があるように思われる。

2つ目の問題は、副詞の *-ly* 接尾辞を屈折と捉える点である。本稿では、副詞の *-ly* を Zwicky (1989), (1995) の分析に従い派生接辞とみなす。副詞の *-ly* を屈折接辞に形容詞の *-ly* を派生接辞に分けて考えると (36a, b) の容認性の違いが (32) によりうまく説明できるが、(9) や (15) で見た **-ishly* や **-ably* の派生語を説明できない問題が生じる。ここでは、(9d) と (9e) の例を繰り返す。

- (37) = (9d) **baddishly*, **oldishly*, **shortishly*
 (9e) **analyzably*, **eatably*, **obtainably*

(37) の *-ly* は共に副詞なので A&F の分析に従うと屈折接尾辞である。したがって、*-ishly*, *-ably* の接辞の組み合わせは派生接辞 + 屈折接辞となり、(32) の制約には抵触しないで (37) の派生語が間違っていないと予測されることになる。

3つ目の問題は、A&F がゲルマン系 (Germanic) とラテン系 (Latinate) の区別を接辞の組み合わせにおいて重要視する点にある。2節で語源的背景を接辞のレベルの解釈に置くことは、言語習得的に困難であることを論じた。言語知識としても語源の理解は複雑である。A&F がこの区別を重視するのはゲルマン系の接尾辞とラテン系の接尾辞が接辞の組み合わせとして明確な違いを見せるからである。(32) の単一語基制約を活かすためにはその区別を欠かすことができなかつたからだと言えるかもしれない。A&F (2002:489) 自身、語源を使うことは歴史に子供がアクセスできない (*no child has access to history*) ことを認識しながらもその区別を使わざるを得なかつたようである。

4つ目の問題は、Fabb (1988) の (31) の選択制限を (32) の単一語基制約

30 いわゆる心的メカニズムとして屈折接辞に見られる、コネクショニズムと二重メカニズムの立場の違いであるが、詳細は伊藤・杉岡 (2002) の第4章を参照のこと。

に発展させるが、A&F (2002:488-489) は我々の見つけたものはすべて謎のままであると告白する点にある。英語にはなぜ単一語基制約があるのか、いわゆる (32) の制約の本質が分からないとしている。将来的には、A&Fが見つけたものが何らかの演繹的な枠組みで説明されることを希望している。A&Fの英語をそのまま (38) に引用してみよう。

- (38) a. We must confess in closing that our major findings all remain mysterious to us.
 b. We do not know why English has a monosuffix constraint.
 c. We hope that these findings will be explained within some deductive framework, though we know of none that can do so at present.

Plag (2002:301) は、ゲルマン系の接尾辞の内部にラテン系の接尾辞が位置するのはゲルマン系の接尾辞がより高い複雑性 (higher complexity) の語を生成し、ラテン系の接尾辞がより低い複雑性 (lower complexity) の語を生成する理由で、CBOに従って正しく順序づけられることを認めている。しかし、Plagは (32) の制約のようにゲルマン系の接尾辞の内部にゲルマン系の接尾辞が位置しない理由は分からないとし、音素配列的な要因が働くとも思えないと疑問を投げかけている。

最後のMC分析の問題として、A&Fの資料に反例が存在し、そのことについて彼らは何も触れていない点を指摘する。(32) はゲルマン系の接尾辞の前にゲルマン系の接尾辞が来る派生語を阻止することを規定したものだが、A&F (2002:471) が示す表には -erdom (8), -ener (32), -eress (29), -erhood (5), -ingless (6), -ership (20) などの反例パターン (数) が挙げられている。具体例はここでは挙げられていないが、(39) のような派生語が関連するものと思われる。

- (39) a. computerdom (電算界)
 b. hardener (硬化剤) softener (軟化剤) thickener (濃縮剤)
 c. manageress (女性のマネージャー) porteress (=portress)

- d. widowerhood (男やもめ暮らし)
- e. meaningless (無意味な、無益な)
- f. dealership (特約店、販売権) ownership (所有権)

(39c) の-eressの派生は上で述べたように、通時的に存在したもので今では生産性が無くなっているのが問題にならないかもしれない。しかし、-enerや-ershipの派生は現在でも使用されている。(39b)に挙げた例以外に、fastener (ファスナー), freshener (元気づけになるもの), frightener (ゆすり屋), sharpener (削る機械) などがあり、(39f)には他に containership (コンテナ船), listenership (ラジオ番組の聴取者), partnership (提携、組合員), readership (読者層、助教授の地位) などがある。A&FのMCの捉え方は接辞の組み合わせをゲルマン系の接尾辞同士に絞り、意味をまったく考慮に入れずに、ただ単に線形的な並びを(32)の制約にゆだねたところに問題が生じてくる。(39b, f)の-enerと-ershipの派生数も多く、現在でも日常的に使用されていることはA&Fにとってそれらの派生語は反例となる。

A&F (2002) のMC分析の問題点を最後に整理しておく。

- (40) a. 動詞の屈折接尾辞の問題 (34a)
- b. 副詞の-ly接尾辞の問題 (37)
- c. Latinate と Germanic の区別の問題
- d. 単一語基制約の本質の問題 (38)
- e. MCでは予測できない反例の問題 (39)

4. おわりに

本稿では、2節において Siegel (1974), Allen (1978) 等による順序づけ仮説の分析の問題を、3節において Fabb (1988) の選択制限の問題、Hay (2002, 2003) の複雑性に基づく順序づけの問題、Aronoff and Fuhrhop (2002) の単一語基制約の問題をそれぞれ見てきた。派生語の内部に見られる接辞の組み合

わせを包括的に捉える分析はいずれの立場も不可能で、(12) (17) (30) (40) に整理したような問題点が指摘される。これらの問題点を統一的に解決・説明するには高橋 (1992) の名詞範疇条件と Takahashi (1992) の形容詞範疇条件が有効であることを最後に述べておきたい。スペースの関係上、本稿ではこの点について言及できないが別の機会に譲る。

参考文献

- Allen, Margaret. (1978) *Morphological Investigations*. Ph.D.dissertation, University of Connecticut.
- 荒木一雄 (1989) 「オーダリング・パラドックスについて」『研究論集』(相愛大学 相愛学園創立百周年記念号) 第5巻, 83-97.
- Aronoff, Mark. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT.
- Aronoff, Mark and Nanna Fuhrhop. (2002) "Restricting Suffix Combinations in German and English: Closing Suffixes and the Monosuffix Constraint." *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 451-490.
- Chapin, Paul. (1970) "On Affixation in English." In Bierwisch and Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*, 51-63. The Hague: Mouton.
- Fabb, Nigel. (1984) *Syntactic Affixation*. Ph.D.dissertation, MIT.
- Fabb, Nigel. (1988) "English Suffixation Is Constrained Only by Selectional Restrictions." *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 527-539.
- Giegerich, Heinz. J. (1999) *Lexical Strata in English: Morphological Causes, Phonological Effects*. (Cambridge Studies in Linguistics, 89). Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldsmith, J. A. (1990) *Autosegmental and Metrical Phonology*. Oxford: Basil Blackwell.
- Hay, Jennifer. (2002) "From Speech Perception to Morphology: Affix-Ordering Revisited." *Language* 78, 527-555.

- Hay, Jennifer. (2003) *Causes and Consequences of Word Structure*. London: Routledge.
- Hay Jennifer and Ingo Plag. (2004) "What Constraints Possible Suffix Combinations? On the Interaction of Grammatical and Processing Restrictions in Derivational Morphology." *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 565-596.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社出版.
- Kiparsky, Paul. (1982) "Lexical Morphology and Phonology." In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 3-91. Seoul: Hanshin.
- Kiparsky, Paul. (1983) "Word-Formation and the Lexicon." In Frances. Inge mann (ed.) *Proceedings of the 1982 Mid-America Linguistics Conference*. Lawrence, Kansas: University of Kansas, 3-29.
- Mohanan, Karuvannur P. (1982) *Lexical Phonology*. Ph.D.dissertation, MIT.
- Mohanan, Karuvannur P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*. Dordrecht: Reidel.
- 中島平三 (1995) 『ファンダメンタル英語学』 ひつじ書房.
- 大石強 (1988) 『形態論』 (現代の英語学シリーズ) 開拓社.
- 岡崎正男・小野塚裕視 (2001) 『文法におけるインターフェイス』 研究社出版.
- Plag Ingo. (1996) "Selectional Restrictions in English Suffixation Revisited: A reply to Fabb (1988)." *Linguistics* 34, 769-798.
- Plag Ingo. (2002) "The Role of Selectional Restrictions, Phonotactics and Parsing in Constraining Suffix Ordering in English". In Geert Booij and Jaap van Marle (eds), *Yearbook of Morphology* 2001, 285-314.
- Raffelsiefen, Renate. (1999) "Phonological Constraint on English Word Formation." In Geert Booij and Jaap van Marle (eds), *Yearbook of Morphology* 1998, 225-287.
- Selkirk, Elizabeth. (1982) *The Syntax of Words*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Siegel, Dorothy. (1974) *Topics in English Morphology*. Ph.D. dissertation, MIT.
(Published by Garland, New York, 1979.)
- Spencer, Andrew. (1991) *Morphological Theory*. Oxford: Blackwell.
- Sproat, Richard. (1985) *On Deriving the Lexicon*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Strauss, Steven.L. (1982) *Lexicalist Phonology of English and German*.
Dordrecht: Foris.
- Szpyra, Jolanta. (1989) *The Morphology-Phonology Interface: Cycles, Levels and Words*. London and New York: Routledge.
- 高橋勝忠 (1987) 「否定接辞に関する考察：un-接辞のクラスについて」『福岡大学人文論叢』第19巻 第3号, 469-487.
- 高橋勝忠 (1988) "On the Principle of θ -criterion in Word Level." *A Conference Handbook* read at the 6th National Conference of the English Linguistic Society of Japan, held at Aoyama Gakuin University.
- 高橋勝忠 (1992) 「語形成における名詞範疇条件」『英文学論叢』第35号, 53-75. 京都女子大学英文学会.
- Takahashi, Katsutada. (1992) "Adjective Category Condition in Word Formation." In *Proceedings of the 5th summer conference 1991, Tokyo Linguistics Forum (TLF 5)*, 181-194.
- Zwicky, Arnold. (1989) "Quicker, More Quickly, *Quicklier." In Geert Booij and Jaap van Marle (eds), *Yearbook of Morphology 2*, 139-173.
- Zwicky, Arnold. (1995) "Why English Adverbial -ly Is Not Inflectional." Main session: *Papers from the 31st Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 523-535.